

「山本脩一郎・志郎教育改革基金」

平成 26 年度
フィリピン デ・ラ・サール大学
短期集中語学研修

報告書

平成 27 年 4 月
大阪大学 CAREN

内容

1. プログラムの趣旨・目的	3
2. デ・ラ・サール大学 CeLL におけるプログラムについて	6
3. プログラムの日程	9
4. 参加者	9
5. 収支報告	9
6. 学生からの報告	10
参考資料 2 事前オリエンテーション配布資料	24

「山本脩一郎・志郎教育改革基金」

理工系研究科在籍の日本人大学院生の短期集中海外研修

1. プログラムの趣旨・目的

1980年代に大学の国際化そのものが将来の日本の課題として浮上して以来、国全体でさまざまな取り組みがなされてきたものの、四半世紀経った現在においてその成果は乏しく、国際的な競争力を持った日本の大学の数は極めて少ないと言わざるを得ない。欧米の大学と比較した場合もさることながら、昨今目覚ましく成長するアジア諸国のトップの大学(例えばシンガポール)と比較しても、日本の大学の国際化が遅れているのが現状であろう。

この現状には主に2つの関連した問題があると考えられる。1つは、あらためて指摘するまでもなく、日本人の英語力に関わる様々な課題である。英語はビジネスであれ、学術・研究交流であれ、その分野を問わず、いわば日本人にとっては世界の潮流に身を置くために不可欠なパスポートともいえる。しかしながら、その英語でコミュニケーションすることへの長年にわたる日本人の苦手意識自体が日本の国際的な知的・学術的交流のハンデとなっていることは事実であり、さらには日本の政治・社会、さらには日本の国際競争力の向上を担う企業のグローバル化への遅れの遠因ともなっている。もう1つの問題は、日本で学ぶ留学生に関わることで、まずは留学生数が(欧米の大学等に比べて)に少ないことと、それに加えて留学生数が比較的に多い大学においても、キャンパス自体が必ずしも留学生と日本人の学生が共に学び、生活するという「国際的な学びの場」として成立していないことが挙げられる。

日本語で学ぶことを前提として留学生を増やそうとした80年代の「国際化」の取り組みとは違い、現在の日本の方針はCOE, G30, 大学の世界展開力強化事業等に象徴されるように、日本の大学においても英語で学位が取得できる国際的な水準の環境を整備し、海外からの学生の数を増やそうというものである。しかし、ここでもネックとなっているのが、国内の大学側の受入れ態勢である。特に国際的な競争力を強化しようとしているトップの国立大学においては、その問題には深刻に受け止められるべきものがある。

こうした日本の状況の中で、大阪大学では2012年に執行部が変わって以来、上記の様々な課題を克服し、国際的な認知度ならびに競争力を備えるための、大学の国際交流の拡充を目標とした新たな取り組みがなされてきている。その一環として、理工系四研究科を主導母体とした、阪大のグローバル・キャンパス構想を促進するためのCAREN (Center for the Advancement of Research and Education Exchange Network) 事業が2014年4月に新たにスタートしたが、本事業は、工学研究科国際交流推進センターが事務局となっており、本センターと綿密に連携する形で、これまでに4つ研究科で蓄積されてきた海外の大学との活発な学生ならびに教員の国際交流の実績と各研究科に設置されている計7つの英語特別コースを基盤に、海外の大学との協力関係も含めた阪

大の「グローバル・キャンパス」化を進めるための支援体制を整備し、その運用体制の恒久化に向けた準備ならびに制度化を主たる目的としている。その目的に向けて本事業では5カ年計画のもと以下の4分野において事業を同時展開する予定である：

- ① グローバル・キャンパスに向けた「基盤構築」事業
- ② 海外の大学とのダブル・ディグリーや単位互換制度を推進する「制度構築」
- ③ 新規海外交流・派遣プログラムの企画・運営のための「プログラム構築」
- ④ 新規英語コースや授業の立ち上げの支援体制を整備するための「コンテンツ構築」

よって、本事業では、海外の大学との交流を促進することのみならず、阪大の日本人の大学院生ならびに教員の国際化、グローバル人材化(英語でのコミュニケーション力の強化)も阪大のグローバル・キャンパス確立に向けた重要なミッションとして位置づけている。特に日本の学生の英語能力の強化は、留学生や外国教員の数の増やし、海外の大学とより積極的な交流を計る方向で阪大内をより自然な「国際的な学びの場」とし、グローバル・キャンパス化するために不可欠であり、また、学生それぞれの将来に職業や研究活動の選択肢に今後グローバル化が進む世界において飛躍できる可能性を与えるためにも極めて重要であると考えられる。そうした教育を積極的に援助することがグローバル・キャンパス化を目指す阪大の責務ともいえる。

工学研究科国際交流推進センターの活動において、上記CAREN事業との協働・連携は有用であり、本英語研修プログラムもそうした連携の1つである。特に、CAREN事業を構成する4本の根幹事業のうち、③新規海外交流・派遣プログラムの企画・運営のための「プログラム構築」として位置づけた事業には、阪大を「国際的な学びの場」として確立するために不可欠な、日本の学生の英語レベルの向上を計ることを意図した、英語研修プログラムの企画・運営が含まれており、これは本センターの活動目的とも合致するものである。その一端として、10名程度の理工系大学院生をH26年度休み期間中にフィリピンの名門で英語のレベルの高さにおいて東アジアでは定評のあるデ・ラ・サール大学のCenter for Language and Lifelong Learning (CeLL)が一般に提供している短期集中英語研修プログラムに派遣する。

本事業により以下のような効果や成果が期待される。

- ① デ・ラ・サール大学CeLLが提供する英語研修プログラムは、コース自体の分野とレベルが細分化されており、英会話、ヒアリング、発音、文法、読解、ライティング、ビジネス英語等のそれぞれの分野について、ビギナーからアドバンス・レベルまで8段階に分かれたメニューがある。受講生がそれぞれのレベルに合わせて自分の受けたい分野のコースを最大3つ選択しメニューを組むことが可能となっており、日本で同様の細やかなコースを組むより費用対効果が優れている。
- ② 約3週間のマニラ滞在ということで、阪大の学生が英語を学びつつ、親切で面倒見のいいデ・ラ・サール大学の学生と英語で自然に交流でき、また海外での生活を経験できることは、学生の知見を広め英語への苦手意識を軽減するために有用である。
- ③ デ・ラ・サール大学には大阪大学のサテライトオフィスがあり、工学研究科とも交流が長く深い。デ・ラ・サール大学の工学部の卒業生で阪大の大学院に在籍する学生も約20名いる。

また本年よりデ・ラ・サール大学がダブル・ディグリー協定を結べるようになり、大阪大学においてもその締結に向けて工学研究科以下、国際公共政策研究科等においても現在協定締結に向けた作業に入っている。

- ④ デ・ラ・サール大学とは、上記の事情もあり、今後、阪大との協力関係はますます深まると予想される。フィリピンの学生は英語がきわめて堪能であり、日本への関心も高く、さらに過去の悲惨な二国間の戦争中の歴史にもかかわらず親日的であり、今後の阪大のグローバル・キャンパスの発展にとって重要な役割を持つようになると考えられる。そのためにも、阪大の学生が英語研修をデ・ラ・サールで行うことを恒久化できれば、阪大とデ・ラ・サール大の関係のみならず、日比関係の橋渡しともなる人材育成のためにもきわめて意義があると考えられる。

2. デ・ラ・サール大学 CeLL におけるプログラムについて

(1) デ・ラ・サール大学 CeLL の概要

デ・ラ・サール大学は、1911年フィリピン初のキリスト教系大学としてマニラ旧市街に創設された。現在では国立フィリピン大学、私立のアデネオ・デ・マニラ大学に並んで、フィリピンの名門大学の一つである。フィリピンのなかでも裕福な大学であり、キャンパス内は緑が広がり、清潔に管理され、充実した施設が整い、多くの学生の学びの場・憩いの場となっている。セキュリティーも非常に厳重であり、入校時のセキュリティーチェックが各ゲートで行われているため、学内での危険はほとんどない。

語学研修施設である The Center for Language and Lifelong Learning (CeLL) は、1989年に設立されたデ・ラ・サール大学の付属語学学校である。英語を第二言語とする者を対象としたさまざまな内容とレベルのコースを提供している。

(2) クラススケジュール

月曜日～金曜日	1 限目	8:00-10:00
	2 限目	10:15-12:15
	3 限目	13:15-15:15

(3) コース内容

必須科目 English for Science

今回のプログラムのために特別設置科目

選択科目 Conversational English (Levels 1 to 8)

(2 科目) Reading Comprehension & Vocabulary Development (Levels 1 to 7)

English Grammar (Levels 1 to 7)

English Pronunciation (Levels 1 to 3)

Writing Skills (Levels 1 to 3)

Technical Writing

Business English

Oral Communication



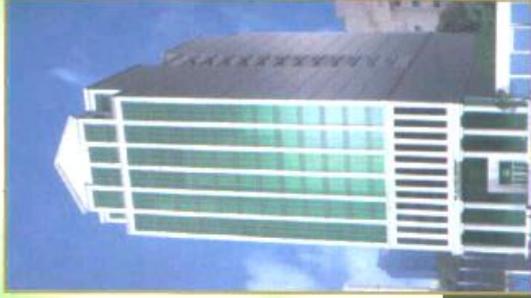
EXCELLENT TEACHERS

The Center is proud of its teachers who are specialists in their fields, particularly on English language and its application. All language teachers are carefully screened and their continuing education is mandatory. This makes the Center the best of its kind on this side of the world.

THE BEST PLACE FOR LEARNING



De La Salle University's Center for Language and Lifelong Learning is housed in the University's Br. Andrew Gonzalez Hall which features world-class facilities. It has a state-of-the-art security system. All CELL classrooms are kept on a par with those of the best universities in Europe and the United States.



De La Salle University
Manila, Philippines

COURSE OFFERINGS

- Conversational English
- English Pronunciation
- Functional Grammar
- Reading Comprehension and Vocabulary Development
- Writing Skills
- Pre-Grad Program in English
- Oral Communication
- Advanced Conversation
- Business English
- A Seminar Course on TESL/TEFL
- Comprehensive Grammar Review
- Review Courses: TOEFL, TOEIC, TSE, TWE and IELTS
- Foreign Languages: Basic French, Spanish, Mandarin, Japanese and Filipino for foreigners

CELL
CENTER FOR LANGUAGE AND LIFELONG LEARNING

Address all inquiries to:
The Center for Language and Lifelong Learning
Rm. 1503, Br. Andrew Gonzalez Hall
2269 Tadh Avenue, Malate, Manila
Philippines 1004
Telephone Nos.: (632) 302-9243,
(632) 524-4611 Loc. 403
Website: <http://www.dlsu.edu.ph>

CENTER for LANGUAGE and LIFELONG LEARNING

A World-Class School
The Center is truly world-class and it boasts of an international mix of students.

Makes Perfect Sense...

The Philippines is the third largest English-speaking country in the world!

As such, the country becomes a key player in the global scene by providing easy access to English language learning in this part of Asia. With a robust, developing economy, it likewise offers a competitive advantage in terms of school tuition and the daily cost of living.



ACCESSIBILITY

De La Salle University is located in the country's capital—Manila. It is accessible through all modes of public and private transportation including a complex, above-ground traffic train system—the Light Rail Transit 1, Metro Rail Transit, and Light Rail Transit 2 or the Purple Line—that snakes its way through the metropolitan thoroughfares and links major school, residential and commercial areas. The university is strategically situated near hotels, condominiums and student dormitories. The Ninoy Aquino International Airport (formerly Manila International Airport) is only fifteen minutes away, and Makati, the country's central business and shopping district, is only a ten-minute ride from the campus.

Academic Cutting Edge

Founded in 1911, De La Salle University has evolved from a traditional grade school into one of the finest, most reputable, and leading universities in the Philippines and Southeast Asia. It has produced countless graduates who have become leaders and achievers—in both public and private sectors—in the fields of business, the arts, education, science and engineering, and information technology.



The Center hones students' English language proficiency in the four basic communication skills of listening, speaking, reading and writing.



The Center for Language and Lifelong Learning

The Center for Language and Lifelong Learning opened its doors on November 21, 1989. It was then called the Center for English Language Learning. A pet project of the late Br. Andrew Gonzalez, FSC, President Emeritus of De La Salle University and former Secretary of the Department of Education, Culture and Sports, it originally aimed to offer courses in English as a Second/Foreign Language (ESL/FFL) to adult learners and other professionals.

The Center for Language and Lifelong Learning is a non-academic unit of the College of Education, De La Salle University, which caters to clients who are interested in improving and honing their English language proficiency in the four basic communication skills of listening, speaking, reading and writing.



3. プログラムの日程

3月2日(月)	出発
3月3日(火)～4日(水)	受講手続き
3月6日(金)	オリエンテーション
3月9日(月)～13日(金)	語学研修第1週
3月16日(月)～20日(金)	語学研修第2週
3月23日(月)～27日(金)	語学研修第3週
3月28日(土)	帰国

4. 参加者

氏名	性別	所属	学年	Class	
阪本 亮太	M	工学研究科地球総合工学専攻船舶海洋工学コース	B4	Conversation 7	Reading 5
石田 裕也	M	工学部マテリアル生産科学科目マテリアル科学コース	B4	Conversation 7	Reading 5
平岡 美由紀	F	工学部地球総合工学科建築工学コース	B4	Conversation 7	Grammar 7
湯川 翔平	M	工学研究科マテリアル生産科学	M1	Conversation 7	Grammar7
安田 栄史	M	工学研究科地球総合工学専攻船舶海洋工学コース	M1	Conversation 8	Reading 5
高木 竜一	M	工学研究科地球総合工学専攻船舶海洋工学コース	M1	Conversation 7	Reading 5
平井 逸郎	M	工学研究科地球総合工学専攻船舶海洋工学コース	M1	Conversation 7	Grammar 6
Khureltulga Dashdavaa	M	情報科学研究科マルチメディア工学専攻	M2	Conversation 8	Grammar 7
明野 優也	M	情報科学研究科バイオ情報工学専攻	D1	Conversation 7	Grammar 6
足立 和彦	M	理学研究科化学専攻構造有機化学研究室	D3	Conversation 8	Rading 7

5. 収支報告

支給金額	2,492,000
執行金額	2,422,357
収支	69,643

支出詳細

内容	執行金額	(詳細)
旅費	881,300	88,130円×10名
海外サポートデスク登録料	23,850	
海外旅行保険料	104,500	10,450円×10名
宿舎代	906,993	3,488.5円×10名×26日
授業料	490,322	49,032.2円×10名
送迎代	15,392	
合計	2,422,357	

自己負担額

Special Study Permit (ビザ)	23,000
---------------------------	--------

6. 学生からの報告



(1) デ・ラ・サール大学 CeLL 短期英語研修への参加を他の学生に勧めるか

【阪本亮太】

勧めたいと思います。フィリピンは official language が英語であり、大学の先生だけではなく飲食店や駅員などほとんどの人々が英語でコミュニケーションをすることができ、日常でも英語に慣れることができると感じました。また大学の周りは比較的に安全で飲食店なども豊富で、不自由はあまり感じなかったです。大学の先生はみんな英語を流暢に話し、授業内容も楽しく勉強になりました。大阪大学に来たことのある学生「ケン」や、大学院時代に大阪大学に在籍していらっかった「メラニー先生」など

の助けもあり、フィリピンに慣れるのが比較的にスムーズにいきました。

ここからは改善点？または問題点なのですが、まず始めに日本人の学生が多すぎることは良くないかなと思いました。クラスもほぼ日本人であるし、ホテルもちろん日本人ばかりだし授業が終わってしまえば英語を話したり聞いたりする場面は少なかったように感じました。次に、やはり Wi-Fi が安定していないことです。授業のことで調べものをしたいときに Wi-Fi が安定していなくて困ったことが多々ありました。

【石田裕也】

今回の研修(デ・ラサール大学 CeLL 短期英語研修)については、条件付きで他の学生に勧められる。条件付きというのは、自分が今回受講したプログラムについて一部物足りなさを感じたためである。

本研修を勧められる理由は三点ある。第一に、海外の人と英語で日常的にコミュニケーションをすることができる点である。大学においても日常生活においても何か必要があるときには全て英語で人と会話を行わなければならない

ためである。今回の研修中、自分はひどい風邪を引いてしまった。その際医者にかかったが、自分の症状を説明するのにすべて英語で説明する必要があった。その経験からも、海外に身を置くことで英語の能力を効率的(必然的)に訓練することが可能である。第二に、フィリピンという場所のため、金銭的負担が少なくて済む点にある。今回の研修中は為替レートが悪いにも関わらず、食費等の生活費は低く済んだ。今回大学側の支援を受けながら研修を受けたが、もしアメリカやイギリスなどの他の英語圏へ同じ支援額で研修に行ったら、滞在期間が短く、十分に勉強ができなかった可能性がある。経済的に受講しやすいという点で勧められる。第三に今回研修を行った大学では、英語を勉強するための制度が整っている点にある。今回受講したプログラムは英語を勉強する人のためのプログラムである。このプログラムでは海外の人も積極的に受け入れて英語教育を行っており、そして個人の能力に応じて英語教育が受けられるため英語の勉強を効率的に行える。また講師がアジア系の人であるため、自分にとってはあまり気後れせず授業が受け

【平岡美由紀】

デ・ラ・サール大学 CeLL 短期英語研修では、3 コマの授業を受けたが、そのうち 2 コマがアカデミックライティングの授業であった。アカデミックライティングの授業では、英語の基礎的な文法から学ぶことができる。基礎的な文法が分かっている学生には、多少退屈な授業かもしれない。また英語で書かれた論文の読み方も学ぶこともでき、国際学会などでの発表に備えて、資料を集める学生には良いと思う。最後

ることができてより集中することができた。その意味でも本研修を勧めることができる。

次に、自分が条件付きと言及した理由を述べる。当初自分は、教員や他国の生徒と英会話を通じて英語の勉強(訓練)をすることを期待して本研修を受講した。しかし今回の研修では、一日 3 つ受けたクラスのうち 2 つが日本人だけのクラスとなり、さらに残りのクラスも、ほとんどが日本人だけのクラスとなり、自分の期待するほど他国の生徒と会話する機会が得られなかった。すなわち日本で英会話の教室を受けているのとほとんど変わらない状況となっていた。そのため、このプログラムを受ける際は他の国の人と交流できるよう日本人を分散させて授業を受けるほうがよいと思う。また、日本人だけで受けた授業では、高校で習うような文法を習い、これも日本で授業を受けるのと変わらない状況だと感じた。以上の点で自分は本プログラムについて物足りなさを感じた。

以上が本研修を条件付きで他の学生に勧められる理由である。いくつかの条件がクリアされれば、本研修はより魅力的なものとなると考えられる。

には英語でのプレゼンテーション報告会があり、自分の研究を英語で伝える良い機会になった。残りの 1 コマはカンバセーションの授業であったが、ディベート形式の授業で、自分の意見を英語で伝える練習ができる。

授業としては、一日 3 コマと物足りない気もした。授業だけに頼らず、授業後のフリータイムを活かして、外国の方と仲良くなることをお勧めしたい。

【湯川翔平】

最初に、私は他の学生も語学留学すべきだと思っている。しかし Cell 短期英語研修に関しては、その特性から、「人見知りをしない、飛び込む勇気をもった学生」こそが参加すべきであると考えている。

私がそう述べる根拠は以下の2点である。

- ・ 授業は基本的に1対多であり、レシーブ型であるため個々人の発言時間が短いこと
- ・ 授業はほぼ日本人だけで行われること

Cell 短期英語研修の魅力の一つは、講師陣のレベルの高さだろう。1クラスの人数はおおよそ10人であり、1対多型の授業なので多くの先生を用意する必要がない。そのため各先生は十分にレベルが高く、講義は非常に分かりやすいものだった。

またもう一つの魅力は、その規模の大きさから学校内に多くの留学生がいることだろう。デラ・サール大学の留学生支援センターに行けば非常に多くの外国人と触れ合うことが出来るため、話しかけられれば多くの友人を作ることが出来る。

しかし逆にいえば、1対多型の授業であるため自分から発言が出来る機会は少ない。そのためリスニング力の向上は期待できるものの、授業だけではスピーキング力の向上は不十分である。

私はスピーキング力を向上させるため、このプロジェクトに参加させて頂いた。しかし上記の理由から、その目的のためには現状を打破することが必要であった。私や他の学生の一部は勇気を出して積極的に外国人との交流を試み、彼らと日々過ごすことが出来たため日常的に英語を使う機会に恵まれ、そしてその結果、夢の中でも英語で会話するほど英語環境に浸かることが出来た。



しかし一部の学生は日本人グループを形成してしまい、英語を使うのは授業のみで放課後は観光の延長のような日常を過ごしていたように見受けられた。

1か月という期間は非常に短いため、目的を持って行動しないと英語力の向上は望めず、残ったものは日本人の友達で行った観光の思い出だけとなってしまいう危険性がある。そのためそういった場合は、1対1の授業が受けられる留学施設に向かうべきだと思う。

以上、色々と条件を書いってしまったが、能動的に動ける学生は是非参加すべきである。私は現地でアジア系はもちろん、ヨーロッパ、中東、アフリカ、北アメリカ、南アメリカなど様々な国の学生たちと異文化交流することが出来た。彼らと一緒にお酒を飲み、一緒に音楽を聴き、一緒に観光に出かけ、一緒に現地の名物食事を楽しむ。その過程で英語力は自然と養われ、思考が英語で行われるようになった。英語力向上の側面だけでなく、様々な価値観に触れることも出来、現地のインフラ環境の不十分さ等、海外留学しなければ肌で感じる事が出来ない空気感も味わうことが出来た。

個人的には英語力向上という側面のみでなく、異文化交流という側面でも最高の1か月となったので、私は上記のような学生に対し Cell 短期英語研修を勧めたい。

【安田栄史】

私はおよそ一カ月デ・ラ・サール大学で英語研修を受けました。大学の建物はどこも綺麗で清潔感がありました。また大学内では様々な国籍の人で溢れており、英語の勉強をするには素晴らしい環境でした。しかし思ったより日本人が多いという印象を持ちましたが、ほとんどはフィリピン人なのかな？と思います。私の受けた授業では、全てフィリピン人による授業でした。どの先生も発音等にくせはなく、お手本のような英語でした。またどの先生もおおらかであり親切な方ばかりでした。私が受けた授業は先生と生徒の対話形式が多く、リスニング、スピーキング、ボキャブラリーに良いと感じまし

【高木竜一】

結論から申しますと、本研修を他の学生へ勧めます。一般的に、マニラは暑い、物価が安い、危険と言うイメージがあると思います。実際、マニラは3月時点で暑いが湿度は低く過ごしやすく、物価は安いですが観光地では高い、思ったより危険でない事が分かりました。昼間以外は外に出やすいため、街で英語を使う機会が多かったです。お金を節約するために、現地の生活を自然に学びます。最低限気をつかなければなりません、治安を気にせず動き回る事が出来ました。初めて海外へ行く人にもマニ



た。授業の種類も豊富で自分にあったレベルなどを選択できるため良いと思います。

また大学はマニラにあることから、周りの環境は日本と比べると見劣りしてしまいますが、コンビニや飲食店が多くあり、近くに大きなショッピングモールもあるため不便に感じるとはありませんでした。天候は乾季であったためほとんどの日が晴れもしくは曇りでした。そして3月はそれほど暑くもなくかなり良い季節ではないかと個人的に思います。以上より、私はデ・ラ・サール大学 CELL の短期英語研修をお勧めいたします。

ラでの研修を勧められると思います。

DLSU は、安心出来る大学である、と言う点で勧められます。セキュリティが厳しいため学内の治安は良く、物を盗られる心配はありません。勉強に集中出来る環境であると言えます。また、個人で留学をする場合、英語だけを学ぶための施設で学習する事が多いと思います。これらとは異なり、現地の大学生と話す事もあり、英語を使う機会も多かったです。例えば、大学の施設で一緒にバスケットボールをしました。大学生活が味わえ、文化も学ぶ事が出来ました。視野を広げると言う意味でも有意義になりました。

授業はレベル別になっており、自分にあったレベルの授業を受ける事が出来ました。特別クラスでは、論文発表に必要なスキルを学ぶ事が出来ました。Conversation の授業には、フィリピンの学生も英語を学びに来ており、議論しあう事によって、お互いの文化、価値観が

分かり合えたと思います。残念だった点は、ほとんどが日本人の学生であった点です。3月は日本の春休みと被っている事もありますが、Conversation の授業では日本人 10 人にフィリピン人 2 人で、特別クラスは全員大阪大学の

学生でした。様々な国の人と話がしたかったと言う点で、残念でした。

全てを考えると本研修は学習出来る環境が整っていると思います。海外が苦手と言う人にもおすすめ出来ます。

【平井逸郎】

私は、DLSU 短期語学研修への参加を他の学生に勧めます。理由は、以下の 3 点です。

- ・ フィリピンを中心とした多くの国の人と交流できる： フィリピン人はもちろん、DLSU にはたくさんの留学生がいて、多くの国の人と交流する機会がありました。各国の価値観、文化、習慣はもちろん、その国の現状を、英語を通して話し合うことができました。研修の最終日にアンゴラから来た留学生に、彼の作詞したお別れの歌を歌ってもらったことが一番印象的です。
- ・ 先生方が大変優しく指導して下さる： 生が懇切丁寧な方でした。質問もしやすく、また、大学での論文やそれに関する資料などの指導もしていただきました。また、フィリピンの学生との交流機会もたくさん作っていただきました。
- ・ フィリピンのような開発途上国の実態を把握することができる： 私は、小学校から大学に掛けて、開発途上国の様子を教科書

やビデオなどを通じて学んできたつもりでした。しかし、実際に現地に赴くことで、より開発途上国の問題点を理解できたのではないかと思います。例えば、首都マニラは、発展を遂げているものの、交通渋滞が常時起きており、また、ごみのポイ捨てが酷かったです。また、フィリピンの田舎でも、ポイ捨てが酷かったです。そして、洪水への対策を取っておらず、台風の度に 1m の高さまで水に浸かると聞きました。

この短期語学研修を通じて、フィリピンが発展を遂げようとしているものの、都市システムを完全に整備することができておらず、ポイ捨てによる悪臭や、渋滞、洪水を防ぐことができていないという実態を把握することができました。語学とは、関係はありませんが、工学の中でも都市システムに少しでも興味があった自分には、大変有意義な時間になりました。語学に加え、開発途上国の実態を知りたいという学生には、強くお勧めしたいと思います。

【Khureltulga Dashdavaa】

I had participated in English training program at CeLL (Center for Language and Lifelong Learning) of De La Salle University in the Philippines for about 4 weeks. In the training program, we studied English every weekday

intensively from very professional English teachers for three weeks. Every day, we had class from 9:00 to 3:15. In addition, we traveled some famous places of the Philippines including Taal Mountain, which is active volcano with

lake on the top, even though we had little time after our English classes.

The short answer is “Yes”. This could be very good opportunity for not only in learning English but also experiencing life in overseas. About the learning English, as written above, very professional teachers teach English to students. Especially, each teacher has specialised in one or couple part of grammar, speaking, reading, and pronunciation. And they teach those specialised part very effectively. For instance, I took conversational English class, and our teacher was very good at teaching how we should communicate in English. Basically, she taught us general expression for explaining our feelings in English since our English class level was 8. In addition, there was few students in class, we had lot of time to practice. Also, we had academic writing, reading, and presenting class in the morning every day. In this class, our teachers taught us basic writing technique of

academic writing which has very strict rules.

English is second official language of the Philippines. Almost all of the Filipino can speak English very fluently. So, it was very effective English training because our environment including restaurants and shops was English. In this way, I believe our speaking ability improved very well.

Furthermore, it was the first oversea country that we stayed almost 1 month except me living in Japan. We go to overseas for traveling or attending to international conference. However, it is about 4 or 5 days usually. For the reason, it was very good experience for students living in the Philippines for almost 1 month. By living in the overseas longer, we truly can understand difference of the culture from our country. Even for me, that I lived in Japan for several years, it was very good experience that I understood good and bad points on living environment, communication of people, and so on.



【明野優也】

海外旅行以外では海外に滞在したことがないという方に、「デ・ラ・サール大学短期集中語学研修」を勧めることができる。なぜなら、海外に滞在することにより、自分の英語運用能力で足りない点を認識することができるからである。かくいう私も、今回が初めての海外滞在であった。高校と大学で一通り英語を勉強したので、日常の英会話くらい難なくこなせるだろうと思っていた。しかし、飲食店での注文や、ホテルのフロントとのやり取りなどはできたものの、現地の先生や友達との日常会話となると、言葉が出てこないことが多かった。そこで初めて、英語で相槌を打ったり、自分の気持ちを表現したりすることが苦手であると認識することがで

きた。そして、研修中にはその点を克服するように意識することで、渡航前よりも英会話は上達したと実感している。このように、英語での生活をすることによって、自らの英語運用能力上の弱点を知ることができるので、海外での語学研修を勧めることができる。なお、私は、他国での語学研修に参加したことがないので、それらと比較して「デ・ラ・サール大学短期集中語学研修」を評価することができない。しかし、個人の英語の能力合わせた授業をしてくれたことや、先生やスタッフが親切であったことなど、当研修には非常に満足している。したがって、「デ・ラ・サール大学短期集中語学研修」を勧めることができる。

【足立和彦】

今回私は3月2日から同28日までの約1ヶ月間フィリピンのデ・ラ・サール大学で短期英語研修プログラムに参加した。以下では、私が他の日本人学生に CeLL への英語研修参加を進める理由、さらに今回の体験を通して私が得たもの・考えたことに関して述べたいと思う。

デ・ラ・サール大学はマニラ市街地に位置する私立大学であり、ジプニーと呼ばれるフィリピン特有の乗り合いバスが多く行き交う、大通りに面した場所にキャンパスを構えている。今回私が学んだ CeLL (The Center for Language and Lifelong Learning) は、デ・ラ・サール大学の中でも学術研究を行うというよりも英語教育を行うことに特化した組織であり、主に英語を第二外国語として修得することを目指す学生を対象としている。そのためこのような教育指針は、(私の知る限りでは)研究能力は長けているにもかかわらず英語の能力の低いために

その成果を世界へと発信する能力に乏しい、日本の多くの理工系学生には非常にマッチしていると感じた。

また教鞭をとるフィリピン人の教師たちの母語は英語ではない。確かに英語はフィリピンの公用語であるが、多くのフィリピン人にとって英語は第二外国語であり、公共の場以外では彼らは彼らの母語(タガログ語)を話す。しかしながら私は、このような状況は私たちのような英語を母語としない人に英語を教える上でメリットになり得ると考えている。私は多くの日本人が英語を話すのに苦勞している原因の一つは「英語的な思考」が日本語のそれと大きく異なっているからだと考えている。「英語的な思考」とは、例えば、英語では物事を考え文章にする時、主語→述語→目的語(いわゆる SVO 式)と表現するが、日本語では主語→目的語→述語(SOV 式)とする。このため、日本人が英語

を使うときには、英語の SVO と日本語の SOV の変換を逐次行うことが必要である。このような思考過程を経ることはタイムロスとなるだけでなく、思考の混乱を生んでしまうため、日本人が英語を苦手とする原因となっているだろうと考えている(もちろん、英語的な考え方ができる日本人もいるが、そのような人は極少数であろう)。一方でタガログ語の文型は述語＋主語＋目的語(VSO式)であり、日本語とも英語とも異なる。そのため、フィリピン人の状況をそのまま日本人のそれに置き換えることはできないが、「英語的思考」をしない人々がどのように英語を使うのか、その方法に関して彼らは論理的に教えることができる。多くの日本人が目指

すべきは「英語を使う」ことであり、ネイティブになるように英語を話すことではない。そのため、CeLL で英語を学ぶことは日本人が必要とする英語能力を身につけるのにプラスに働くと期待できる。

さらにフィリピン人の親しみやすさも英語の上達という観点から非常に良いと感じた。英語の上達には実際に英語を話すことが非常に重要である。私が現地で出会ったフィリピンの方々は、よく話しよく聞く人が多く、英語が決して上手ではない私も多くの話す機会に恵まれた。デ・ラ・サール大学の CeLL という組織のみならず、フィリピンという環境全体が英語能力向上に適していると言えよう。



(2) 日本がフィリピンに対してできることはあるのか

【阪本亮太】

(1) でも挙げたように Wi-Fi の安定性や路上の空気汚染、貧富の差や都市部と田舎の発展の差など一ヶ月という短い滞在ではありましたがフィリピンの様々な問題点が見えたように思います。日本がフィリピンに対してできることといっても簡単に言葉で言い表すことはできませんが、上記のような問題点をつぶしていくための資金援助、今日まで日本が発展を遂げた経験を生かした知識伝達、またフィリピンの発展を助けることのできる技術的な援助、様々なことをフィリピンに対してしていくべきだと思います。ここ数年で目覚ましい発展を遂げたからこ

そ、フィリピンは貧富の差がとても激しいように思いました。日本は必要以上にするのは良くないですが、事業をフィリピンまでもっと拡大して、雇用を増やしてあげることによって貧困層を助けてあげられるのではないかと思います。

最後に、このようなフィリピンへの短期英語研修という機会を与えてくださり、手続きや引率など、今回の英語研修に携わっていただいた全ての方々に感謝いたします。次回もこのような機会があれば期間は問わずぜひ参加させていただきたいと思っていますので、またそのようなことがあればよろしく願いいたします。

【石田裕也】

日本はフィリピンより経済的、技術的に豊かであるため、フィリピンに対してできることはたくさんあると考えられる。そこで「日本」を国家的、企業的、個人的という区分けをして、それぞれの立場においてできることを考えてみる。

まず国家的に行えることの一例として、政府開発援助、ODA である。フィリピン滞在中で自分は、都市部の歩道の整備が追い付いていないのを感じた。実際に歩いてみると、所々穴が開いていたり、舗装されておらず足元を注意して歩く必要があり、非常に疲れた。また下水設備が十分でないせいか、川や付近の海が非常に汚れていた。国家としてこういった公共インフラ整備に支援を行うことが可能だと思う。当然日本も、支援を長期的に進めるためにも海洋資源等を優先的に取引してもらうなどの見返りを得るべきではある。

次に企業的にできることの一例として、自動車

の製造にある。自分がフィリピンに滞在していた時、自動車からの廃棄ガスがひどく、初めは息をするのも大変だった。今後排気ガスが都市部で問題になり、低排気量の自動車の需要が高まる可能性がある。そこで、日本企業がニーズに沿った車両を現地生産、現地販売をすることで、需要に応えることも可能で、かつ現地での雇用も生み出すことができる。また企業としても、新しい購買層を得ることが可能であり、企業側にもメリットがあると思われる。

最後に個人的にできることの一例として、フィリピンでの消費である。フィリピンは日本に比較的近く、セブ島など有名な場所もあり行きやすい場所といえる。そこで、多くの日本人がフィリピンに出向いて消費をして、その分だけフィリピンの経済を活性化させることが可能である。この方法は国家、企業的な支援より、最も簡単に自分の手でできることだと思われる。

【平岡美由紀】

デ・ラ・サール大学の学生は裕福な学生が多く、日本の学生となんら変わらないが、大学周辺には貧しい生活を送る人々も多く見られた。大学に行けることが特権と覚えることが度々あり、修士課程に進むことを現地の人々に伝えると、すでにエンジニアであるかのように扱われる。実際には、日本の学生がエンジニアとして即戦力にはまだならないのだと思

ながら、それほど必要とされていることを実感した。街中の建設現場をのぞいてみても、現場の状況はまだまだ良くなく、そのような工事で建物が建つのかと何度も驚いた。フィリピンは日本と同様に地震がある国である。同じ地震大国である日本から、建設の技術や技法を一般の工事でも受け継いでもらえる程に、継続的に支援していくべきだと思う。

【湯川翔平】

この留学を経て、日本がフィリピンに出来ることは沢山あると感じた。

最初に多くの人を感じることは社会インフラの不十分さだろう。「シャワーのお湯が出ない、水道の水は飲めない、交通渋滞が酷い、雨が降ればすぐ洪水が発生する、道路の舗装状況が酷い」などは多くの人を感じていることだと思う。日本がいかに豊かな国であるかを痛感した。

また、マニラにおいては慢性的な仕事不足も目に付いた。路上では物を売る人や寝ている人が溢れ、スーパーでは従業員が飽和し、お喋りを楽しんでいる。

これらから考えると、日本が出来ることは

- ・ インフラ設備を整えるための技術提供
- ・ それによる雇用の機会を生むこと

ではないかと思う。

フィリピンに限らず、アジアでは今後インフラの発展が必要不可欠だろう。そういったニーズに日本の企業が応えることが出来れば、現地の人にとって住みやすい環境作りに貢献できると思う。



【安田栄史】

私が滞在した都市はマニラであったためか、それほど日本が何かをやらなければいけない！という気持ちにはなれませんでした。裏通りに行くとストリートチルドレンやホームレスも多くみられましたが、この問題を日本が解決しな

ければならないとは思いません。強いてこの課題に対する回答を出すならば、もっと日本はフィリピンの会社に対して投資すべきだと思います。特に大きな理由はありませんが先進国ができるたくさんある一つの方法だと思います。

【高木竜一】

以下の3点で日本はフィリピンに対して出来る事があると思います。

① インフラ整備

フィリピンのインフラは日本に比べると不十分な部分が多いです。例えば、水道水はキレイではないですし、時々停電も起こります。中でも一番整っていないと感じた部分は下水システムです。私たちが訪れた3月は乾季でしたが、一度雨が降ると数日水溜りが残ります。さらに、ブラカン州にある現地学生の実家を訪れた途中、バスは水の上を走りました。水深は50cmほどあったと思います。訪れた家は一階の天井が低かったです。これは、毎年雨で水が溜まる高さまで、地面をコンクリートで固めて高くする作業を繰り返したからです。雨を流す設備を整えなければ、この困難は毎年起こります。日本の優れた土木技術で改善出来ると思います。

② 交通安全

私の滞在していた地区には、地元の人に使われる主な交通機関が二種類あります。一つはジプニーで、もう一つはLRTです。ジプニーは乗合バスのような乗り物で、乗客は横を向いて座ります。車体の後部は開けっ放し、シートベルトがない、壁に突起のある飾りが多い等、安全性は皆無です。マニラの道路は常に混んでいるため、事故もおおいです。本数は多く、料

金は一回20円程です。合図をした所で降りる事が出来るので、利便性にも優れます。一方、LRTはモノレールに近いです。料金は一回40円程、本数も少ないです。日本製の車両が使われている事もあり、安全性は高いです。車内は常に混んでいました。ジプニーに関しては安全基準を作って車内の危険な箇所を減らし、LRTに関しては交通整備して速度を上げ、本数を増やす事で、混雑を解消したいです。

③ 経済

フィリピンへ進出する企業を増やす事で、フィリピンの経済に貢献出来ます。フィリピンには企業が少ないため、雇用を増やすには海外企業が進出するしかありません。日本が技術提供して、経済発展の手助けが出来ると思います。私の専攻は造船で、ship building と言うとDLSUの学生からTsuneishiと返ってきました。常石造船は海外展開を進め、フィリピンのセブ島に造船所があります。DLSUの学生の多くはこの事を知っていました。それだけ、フィリピンへ展開する外国企業の存在感は大きいと思います。現在、フィリピンは働き手があふれています。大卒でも飲食店で、日本で言うところのアルバイトのような仕事をする人が多いです。日本企業がフィリピンへ進出し、フィリピンの若者を雇用する事で、経済発展に貢献出来ます。

【平井逸郎】

先ほど(1)で述べたように、フィリピンの都市システムやインフラを私は、問題視しています。そこで、都市システムやインフラの整備を進める上で、日本ができることを2点、以下に記したいと思います。

- ・フィリピンの社会インフラを考える機会を与える：そこで、フィリピンの方を日本に招き、日本の都市システムやインフラについて見学してもらいます。見学後に、フィリピンの都市システムやインフラのあり方について、ディスカッションを行い、考えてもらう機会を

作ります。他国と自国を比較することで、社会インフラの見え方が変わってくるのではないかと思います。

- ・フィリピンの社会インフラが抱える問題への技術的なアプローチ：上記では、「問題意識」を具体化させるための機会を与えるといた提案であり、ここでは、具体化された問題に対して、技術的にアプローチ、サポートしようという提案である。例えば、ごみ処理のシステムの考案を手伝い、また、ごみ処理施設の建設に立ち会うなど。

【Khureltulga Dashdavaa】

The Philippines is developing country. Because Japan is developed country, there could be many things can be imported to the Philippines. One big thing I noticed is that Metro Manila's pollution. For instance, there are many

old cars, like Jeepno, are serving to the public. In my opinion, modern cars including hybrid cars are suitable for the Philippines because weather of the Philippines is not cold.

【明野優也】

日本がフィリピンに対してできることの一つは、インフラ整備の支援であろう。フィリピンのさらなる発展のために、都市部のインフラの整備が必要であることは、しばしば指摘されている。実際、私は「デ・ラ・サール大学短期集中語学研修」で、マニラに滞在することによって、そのことを強く感じた。特に、交通インフラの整備が重要であると実感した。以下では、マニラ滞在時に感じた交通に関する問題点と、その解決のために日本ができることを述べる。

日中のマニラの道路は、常に渋滞していると言っても過言ではない。個人所有の自動車や、トラック、タクシー、ジプニーなどがごった返し

ており、なかなか前に進まない。例えば、滞在先のホテルから、マカティ市までタクシーで行ったとき、Google マップで調べると20分で行ける距離であるが、渋滞のために2時間ほどかかった。このような渋滞が毎日発生しているのであるから、経済損失はかなり大きいだろうと思う。また、渋滞は人命にもかかわる。サイレンを鳴らした救急車や消防車が、渋滞のせいで立ち往生しているのを何度か見かけた。他の車両の運転手が道を譲らないのではなく、道路いっぱい自動車にひしめいているため、道をあけることができないのである。緊急車両の目的地への到着が遅れば遅れるほど、助

かるはずの患者も助からないであろうし、ボヤで済んだはずの火災も大きな火事になってしまふであろう。このように、マニラでは深刻な交通渋滞が生じている。

マニラにおける交通渋滞の主な原因は、鉄道網の不足であると思われる。マニラには、鉄道路線がいくつか存在しているものの、主要都市間の接続が十分ではなく、利便性が高くない。そのため、人々は、マニラ内の移動手段として、タクシーやジプニーを含む自動車を選び、その結果、車両が密集することとなって、渋滞が発生しているのだろう。例えばもし、東京や大阪で鉄道が発達しておらず、人々が通勤などのために自動車を使うとしたら、毎日渋滞が発生することは容易に想像できる。マニラで起きていることは、おそらくその状況に近いだろう。したがって、マニラにおける深刻な渋滞の解消のためには、鉄道網の整備が重要であると考えられる。

日本は、マニラにおける鉄道網の整備に対して、経済支援だけでなく、技術面での支援もできる。鉄道網の整備には、多大な資金が必要であるので、その援助を行うのはもちろん有効であろう。しかし、それだけでなく、路線の計画法や、建設にかかわる技術を伝えることも有用であるはずだ。なぜなら、日本の都市部と同様の狭い土地の中で、効率的に運用できる鉄道網を建設する必要があるからである。日本の都市部で鉄道網の整備した際の技術や知識



は、マニラにおいても活かすことができるであろう。

フィリピンのさらなる発展には、マニラなどの都市部の交通事情の改善が必要であると言われている。そのためには、交通インフラを整備することが必要であり、この点において、日本は経済支援だけでなく技術面での支援も行うことができる。したがって、日本がフィリピン首都部の交通インフラの整備を支援することは、フィリピン全体のさらなる発展に大きく寄与するだろう。

【足立和彦】

CeLL での英語研修の期間中、私はフィリピンが未だ発展途上国であるということを思い知らされる光景をいくつも見てきた。緑豊かなデラ・サール大学のキャンパスの周囲にはスラム

街が形成されており、キャンパスから 10 分も歩かない距離に物売りなどの日銭を稼ぐ人が大勢見られ、その中には学校に通っているべき年齢に見える小さな子どもの姿もあった。日本

も貧富の差が拡大していると言われていたが、フィリピンで見られた差は日本のそれよりも大きく感じられ、同じ場所ながら全く別世界に暮らしている人々のように思われた。特に貧困層の子どもたちは学校に行く機会にも恵まれないと考えられるため、彼らが貧困層から抜け出すのは至難の業であると感じられた。

このような貧富の差は一朝一夕には解決する問題ではないが、「教育」が一つのキーワードとなると私は信じている。教育により優秀な人材を育成し、フィリピン全体が少しずつでも発展していくことがこの問題に対する解決策となり得ると考えている。しかしながら、私がデ・ラ・サール大学で見た研究環境は日本のそれと比べ圧倒的に悪く、フィリピンが日本、あるいは世界の研究レベルに追い付くことはとても難しく感じた。このような状況を打破するためにも、私は、日本はフィリピンと教育的交流をもっと積極的に進めていくべきであると考えている。日本の研究水準は世界的に見ても高いレベ

ルにあり、フィリピンの学生にとって大きく成長するチャンスを提供することができるのではないかと考えられる。また、受け入れる日本の側にとっても、高い英語能力を有するフィリピン人の学生とともに研究を行うことで、日本の学生が日頃から英語を意識しながら研究に取り組むようになると言った相乗効果も期待できると考えている。一方的に受け入れるという考えでなく、相互にメリットを生む協力関係を目指すことが、継続的な関係の構築に重要であると考えられる。

今後世界全体が発展していく中で、日本の地位は相対的に低下していくことが予想される。そのような将来を見据え、今日本がフィリピンのために何ができるかということだけでなく、将来日本はフィリピンとともに何ができるかを考え、強固なネットワークを少しずつでも築いていくことが、日本の将来戦略としても必要なのではないかと考えている。



参考資料 2 事前オリエンテーション配布資料

2015年2月24日

DLSU 短期英語研修 事前オリエンテーション

【本日の予定】

10:00-10:05 挨拶

藤田清志（工学研究科国際交流推進センター 教授）

10:05-10:30 DLSU 短期英語研修プログラムの説明

田中希穂（基礎工学研究科 特任助教）

10:30-11:00 フィリピン滞在における注意事項

佐藤治子（基礎工学研究科 特任教授）

11:00-11:45 諸手続き・情報等

田中希穂（基礎工学研究科 特任助教）

11:45-12:00 質問等

【プログラムについて】

1. スケジュール

3月3日(火)～4日(水)	受講手続き
3月6日(金)	オリエンテーション
3月9日(月)～13日(金)	語学研修第1週
3月16日(月)～20日(金)	語学研修第2週
3月23日(月)～27日(金)	語学研修第3週

2. クラススケジュール

月曜日～金曜日	1限目	8:00-10:00
	2限目	10:15-12:15
	3限目	13:15-15:15

3. コース内容

必須科目	English for Science (特別設置クラス)
選択科目	Conversational English (Levels 1 to 8)
(2科目)	Reading Comprehension & Vocabulary Development (Levels 1 to 7)
	English Grammar (Levels 1 to 7)
	English Pronunciation (Levels 1 to 3)
	Writing Skills (Levels 1 to 3)
	Technical Writing
	Business English
	Oral Communication

プレースメントテストおよび面接によって、レベルが決められます
選択を希望する2コースを検討しておくこと(別添資料参照)

4. 準備しておくもの

パスポートのコピー
2×2インチの証明写真2枚
ファスナー付ファイル
Special Study Permit (SSP)申請手数料 9,000ペソ

【手続き・諸情報】

5. 海外渡航届

工学研究科：教務係にて「留学・海外研修届」に記入・提出すること

理学研究科・情報科学研究科：大学院係にて「留学・海外研修届」に記入・提出すること

6. 海外旅行保険

三井住友海上海外旅行保険パンフレットおよび重要事項説明書はメール添付にて送付済み

三井住友海上海外旅行保険「申込書」に署名すること

保険料 10,450 円を支払うこと

「立替払請求書」に必要事項を記入し、提出すること

7. 滞在ホテル

Taft Tower Hotel (<http://tafttowerhotel.net/>)

2339 Taft Avenue, Malate Manila

(02) 5670651 to 53

reservation@tafttowerhotel.net

8. 医療機関

・ 日本人会診療所

月曜日～金曜日 8時30分～11時30分, 13時30分～16時 (除く祭日)

土曜日 8時30分～11時

所在地：23F Trident Tower, 312 Sen. Gil Puyat Ave., Makati City

電話：(02)-818-0880 819-2762

<http://www.jami.ph/clinic.html>

・ Makati Medical Center 救急外来あり

所在地：2 Amorsolo cor. Dela Rosa St., Makati City

電話：(02)-888-8999 892-5544

<http://www.makatimed.net.ph>

9. 予防接種

A型肝炎, B型肝炎, 破傷風, 日本脳炎, 狂犬病等の予防接種が推奨されている

予防接種が可能な現地医療機関については別添参照のこと

その他詳細情報 在フィリピン日本国大使館：<http://www.ph.emb-japan.go.jp>

フィリピン保健省：<http://www.doh.gov.ph/>

世界保健機構：<http://www.who.int/countries/phl/en/>

10. 通信事情

日本に比べれば安定性や速度，カバーエリアといった品質の部分でまだまだ劣る
滞在ホテルでは，ロビーにおいて WiFi 接続が可能

11. 航空券

配布された航空券の氏名を確認すること

12. 出発

3月2日(月) 7:30 関西空港チェックインカウンター前に集合

出発当日の緊急連絡先

田中希穂 Tel / Email (削除)

藤田清志 Tel / Email (削除)

13. 帰国

3月28日(土) 11:00 宿舎出発 (送迎者手配済み)

空港税 (550ペソ) が出国時に必要なため用意しておくこと

14. 渡航安全関連情報

外務省海外安全情報 <http://www.anzen.mofa.go.jp/>

厚生労働省検疫所 <http://www.forth.go.jp/>

15. 緊急連絡先

担当教員連絡先は別途提示

アイラック安心サポートデスク	CS-emergency@i-rac.co.jp
	1-800-1-110-0836(国際フリーダイヤル)
	(その他, 国際コレクトコールの番号あり)
三井住友海上ライン	81-3-3497-0915(コレクトコール)